

五江年表

四

和書門	
類	三六四三九號
函	一二二
架	一四一
冊	八

內閣文庫	
和書	三六四三九號
類	八冊
架	一四一函
冊	六

內閣文庫	
番號	和 36439
冊數	8 (4)
函號	141 91



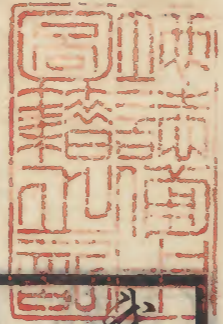
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM Kodak





武江年表卷之四

正徳元年 辛卯 五月七日改元

正月四日未刻芝土つひけ芝町なま股倉より火為水風小漣ひ新堀芝

有店海をまて武家町屋ともふ新焼め刻結る

○正月十九日新和泉町より火乾風烈しく雲巖湧ふり

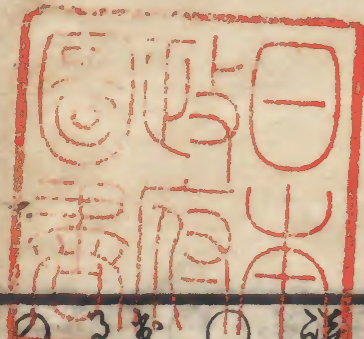
新火燧共ふり又
十町計り焼る ○正月廿五日日光大師五百年忌あり 東漸大師の

後号をぬふ ○二月江州土山田村右軍像儀祭あり 冥帳

○二月まのむら下忍池の辺より火為水風烈しく延焼万敷ふり

○二月十五日より五月まで橋場総合祭あり 梅若丸妙春尼

七百世二年忌より圓向あり 本母ち縁起ふり
七百世五年あり



○二月羽田要所院主院小森才天初啓 有る家小森才

○二月五日より六月廿日までに水代もあましく房州清澄寺虚空

院并宗帳 ○夏中より圓向院にて甲辰八月市切不初宗帳

この時よみ橋本清松屋三左衛門とのみ友よりぬて花宗子として製し高きよりぬ
宗務も子とのみ友の人の名もきりぬきよりぬて製しけりよりぬてはまらぬ
はくともどもつとまらぬと長尾家の清光と
はくともどもつとまらぬと世の清光とみえたり

○七月より言れ改め新吉東大門口の言れを改め

○八月にッ宝源通用をトまる ○八月九日大風

○九月十八日落合村養雲より然尼殿 禪尼のた徳善く人の
初る不ぬとら不累に

○今年後辺上草菴率 百三十才
大堀垣 ○三橋稲荷社にて今年より

非道七表法といの事本を改め始む はるに府社界に
おまらぬとらぬ

○十月朝鮮人東渡 心後越後後 副使任守軒 後事本朝あり 藤宿是と
を推しあり 一は川に引くらるる 今年よりハ本を改め



と改め新井白石先守宝徳果先守韓人のみと改めは時白石朝鮮人本と同言あり
等法を新養徳輯録して江守等潭といふ字本一冊あり 幸卯_{心後}十一月五日在江
村白石源若次_{新井院}来訪 館下ととらぬ ○十一月廿八日親雲上人に百五十_{心後}忘法舎

○十二月又日法天上人坊上より伝蔵小令せ

○十二月十一日申刻連雀町よりお火乾の風烈しく通町本浪町本

町石町に丁目まであましくは焼燬まで一石橋日本橋焼燬落雲宗帳

清まで焼燬同日夜宮刻火焼了 抄りふけ時連雀下
ハ次田町漢小あり

正徳二年 壬辰

正月八日儒師中邑留漢率 名願言孫新八漢率
ハ新古町妙短古小尊也

○正月十一日 一後不日三
正月七日成云 凡卯焉新保師寂 約也言林古小尊也
曹洞の智藏あり

○日本橋江戸橋の男度小浜と改め ○二月白石先守_{心後}紅毛人乃

藤宿不のりて同對の事あり

○二月八日淺草より奉所河目まで焼亡奉所止救小庵建つ

○二月品川世還若村改新おぼる并平村と猪河小目村小

お味○七月廿二日水戸府城所尾氏の室長山霞子奉四十二才

寺山紀史時人修末あり○九月一日室館通用止

○通志予目呂後店白木の井去歳級を入る扱月を経て今

年其白木を獲りり来聘の韓人朴同知海城級を撰今年十月

赤井將久家より銅鑄小鑄を

正徳三年癸巳 九月間

正月廿七日狩野岩朴常伝奉七十八才

○三月二授立二授立の船を捕せし

○二月本挽町山村長を芝居あて助六の親玄始て奥の

○二月晦日江戸中白寺の花障又合判の物さあ

○五月二日傷作大高芝山奉名季郎 録清也

○五月十九日の夜虫を筑現は成時とて中層へ流月升り

一丸光あひくく丸光信くさり一丸より丸光あひくく

丸光屋鹿小あて○十二月廿二日下谷よりお火下谷浅草辺焼亡

疑一○今年深川之十三間堂焼亡同六年再建あり

同日年 甲午

三月本挽町六丁目山村長を芝居ざんせつ以絶この所御保止と高初其高八丈

約銀うゝ一能もあき候ふ 江戸をある十帖不云この時芝居一番切の道がといふ

依て本居あて人よすふさくのをさ 一々人長をあるおあめや平次中さ大坂より来り

あまの大本付正所といひる 齒磨店のはよひける男うきき候者芝居あめめの高及さといひ

けり又餅屋所あて山城屋といひ 酒屋の中男も芝居村半をみる高色をつひけるゆ

年改らまゝあて人小暇をえひ といふ本居あて芝居をさす小女八蔵人いける

す是に江戸芝居録改改若の声を つらふのさすめあてりあてり

○五月新金銀市吹替 ○五月二日品川東海より源院始溪和

尚寂石次院第の ○八月六日より十五日まで増上する山内常照院卒

その光二子也牙実性 ○徳國風塵 ○八月六日医原本下林林卒元子の父麻

○九月廿二日根津持現お終江戸町中々練物あり廿一日あり一雨天候

今年より一幸ふて其の善教五十番町敷百五十四丁あり一其の善教月曲亭

湯屋といふ書小あつて色いろ小畧一その乃節のこをありけ

熱門より茅町通西川家西根津田原神裏門通り島平橋入神田橋より渡持院

表毎り元版田町田安中を入竹橋をお終の口大久小浪脈治橋門ありち町

通りよりあり町也日本橋日市土多ありは旅而更より日本橋後り通り町

筋遠橋より上野より石川家前茅町より本社へ序興あり一とある

○十一月琉球人東歸心使与那城王子

○十一月に宝銀を以て新上銀小吹替あり

○十一月十一日夜光物原己より成玄く花を名雷の如く震動あり

心使乙未

二月廿一日儒師源見訶亭卒名直一弘永常

○二月廿二日湯島新八十才あり尚齒命あり列府の案を委隨翁百平

小森園森百二十右結宗見百八石寺宗英九十下桑七玄清九十染入

谷口一雲九十忌中事之取八十

○二月日光山百年御神忌法法会あり

○心使より京保よりあまて中橋度小浪より盆中夜ふ入る

より集り踊りをとどる ○十月十七日俳人調和卒八十才西

○十二月晦日夜半計り小終の口辺より火より火警標法門内

殺齊屋橋法門内まで中橋より火は橋までの町屋本挽町より

翌二日月元日夕々く終火

此年間記事

角力取松風剛年傍能忠之巻津大園とあり正徳二年御司谷
鬼子母非初ノ歌を収む○那入そのわ女ま賀あ園の山の内の橋の樹の二十六
株を栽る奇仙橋と号す

○深井植木在任其樹勢汚瀦濁を多く育いける
若小泥せる面白き
二重敷いづる也

本もこまの庭不植一あり喜保のほろろ百種の楓を集めを鳥を授刻しませり
地務抄長し花林抄を系花林抄終等の編集あり持不えりて世に流るる

○浮世珍所著川所宣正徳中七十餘才ふ一々終まり難習し
友行りて

懐月ま堂ま号ま安ま堂ま
録七 此の以初まる

○小舟町天主堂の時山門の造り材大根河運寄る事正徳中

とより始り今ふまるとい
小舟町天主の庄屋むむ一ハ小舟町小あり一と正徳
中疫癘は是一時小舟町の内屋をとり外雲を

小舟町へりて疫癘をとりいりて後へ一まゝに長く小舟町まうつ
りて土人の口碑小舟り又豊川系ら編の潭流ありまうつとせり

○武江披砂ひさ云小石川古殿海瘡うきと橋新社八家永中北田倉所用

所及月於その大茶氏後居の時系於吉田家の難堂かた橋あはら川の
瘡を福新を大茶氏の鏡をとて一々勅信をと正徳中法用所及

一統引拂せしと白山しやん出船へ智地を下さまし一時福新社の白山

後一けら奇蹟の事ありて法作のりの橋けらうと後まにま知く
引後一けらとあり

○菅原すげの古ま集まあり一とと書おととるさうあり正徳の以築地

小笠原おがさわら乃乃具持なり仲な重なとりの奥おく帳ちやうりを一ままに橋を在る山

本居年々来見ま無まありて書始あり一と書本終結しふりり

享保元年 丙申 二月圓 七月朔日迄元

正月元日去奉除夜の大火あきふ今夕けまり終る
鳥帽子重番の事と大酒
人形或ハ遊戯すもの

けらうお焚火の記しりりり 十一日又池の端より火殺しては神田辺本町

石町日本橋又巖の近地焼多々櫛舎も中けつるより折焚
業の記おも見えたり○同十八日浅草寺の西邊より火入り
本所河川ぬく焼亡り

○半蔵清門外橋法門清和寺の古木のこゝ通塔をめぐりぬ

○八月十五日能人山は素半率七十五才弱以
巻津院半率

○十一月廿九日夜光村の○十二月廿七日傷所本下道山率名えり
号菊下

麻布屋敷
七半率 ○折焚業の記成新井白を中
編写本

享保二年 丁酉

雅苑群社集 丁酉の〜後句

唐蕨河下りもあつて町や業乃事

正親町公通下

○正月廿二日末刻小石川三橋根井が火入り火湯ぬけ神田

後持院の莊しちうけん神田橋法門内銀治橋法門まで徳侯の藩邸やまが

宇通町八丁塙築地まで武家町まで野々〜焼亡あり

○災後後持院を小日向こひなたの末小橋まで〜その海兵衛子橋が

武家屋敷跡地とあり○正月廿二日能人北屋浮世率四十
八才

小日向金剛
寺小築以 ○二月十一日能人下村堤亭率作川法福寺
南院小築以

○六月後炮海船松町より約込富士権隈の花万度まで〜率

今率より〜まる○七月後炮海法屋流止

○八月新金を〜金通用止三年限り
内修止

○八月十六日大風雨家屋を損ぎ

○十二月十二日神田横大工町より火入日本橋ゆまで焼矢

○同廿八日遊〜より本込山伏町より火入魏町に谷芝田町まで

燒亡○十二月 日田中五隅率

武嘉川邊の西小向村ぬ光寺に華多くと書古冠草老人と云一年河内川の流を治るに四あり

後て臣中の列小加へり

享保二年 戊戌 十月至

喜多りの停勢を事官とありかして諸寺をとり難

○二月十五日深川率整とる皇缺地流る今日とりをありかして

皇歳群集の終りの終ひをうらりよし江戸妙子あり

○二月廿二日傷作園井黃陵率 名孝祖 孫長右衛門 三福 孫長右衛門

○五月朔日五郎兵衛町より火通町八丁堀辺築地まで焼亡

○五月十五日傷作酒泉沙形率 名弘 孫長右衛門 中見樹院 孫長

○六月七日日本提儀示抗法とる智あり

○六月十八日能人其由亭ぬ我率 六十七方本 本形と小華

○七月十五日祐天上人月黒小寂 八十二方 享保中二世祐海上人

送孫下寺を達とる祐天寺といふ

○八月廿六日傷作之宅親調率 孫九十方 孫長右衛門 流老と小華

○八月廿七日市村作とる忠忠室中道世一率所小自提院とて寺と

軍制一被阿と号し候しけるうふ年十月十日ふふふふ

大波しををとり ○十月廿日將社探候とる政率

○十月末智座百人不定る ○同十月新令限引智始る

○十一月琉球人東渡 正徳 徳末子 ○十二月五日小石川白山に敷焼

○後事とる旧家の麻店へ持法院 傳正とる後事麻の名をぬき

同 己亥

正月元日酉の時日焼 二方本 ○二月十二日本町を内外都田焼失相と

十日自あきりて漸く晴る○二月廿二日重徳を子し五百奉出忌

○二月十八日より五月廿八日まで浅草寺親世名御帳貞享四年より
世三年目あり

○四月十二日安後東野率号本壁社に在りて千七百
あり橋脇福善院に在り

○江戸町火消い方は相とまる○五月浅草寺本堂修葺十万人

構始る日六奉九月小
いりて浅草○浅草法蔵の弟六天社今年男不羅り今の

地へ入る○九月朝鮮人來聘正使供致片副使英踏後奉奉明彦等
あり旅者初来本邦なる
以朝鮮人曲るを

○九月廿日韓人遣
勇向常町築院よりお火奉八丁

塔辺野焼○十月新吉原の町を又七と云りの品川筋の町人をうて

ら以御殿山の上りには操せ之居を元多る辰重八郎を擲名取あり
同十のりより二旨のりありせ

○十二月九日能人天姥櫻障率号五五番町あり
新光町あり

享保五年 庚子

二月廿五日堺御形大お操大聖と焼亡おさか

○二月廿七日午半刻蒲原町よりお火南風烈々となり町日本橋

を焼る町を喰町と名付田辺和泉橋下若上野坂中合移其の端

を焼り焼る○上野二五門迄連る

○七月廿二日儒作中村掃藻率五十に方名冠善
深川要津あり

○八月園東波あり○八月町火消の纏弁に之組の方域を記し

長七尺の鳴流を中又提を記し之を望之懐を副由は時代の様を
後のはつとて

○八月十八日儒作新田掃藻率林掃平
合平の男○九月に日大風

○九月廿一日白山権現を神養子町よりか練坊を記し中絶

○今年冬冷泉中納言為總令法系向あり鳴る均女伝通由身

○洞房淨室法寫奉 五月乃此亦編 板中の元文三年之

○吉系丸鑑三冊法 志の志山隠士 撰席裡とあり

享保六年 辛丑 七月

正月八日昼四時長後町よりお火入水大風通き午時より系橋
本村本町八丁皆本挽町後炮海築地靈巖長崎町まで焼了

○二月二日辰下刻之河町に丁目裏町よりお火入を神田を下谷
上野に生門焼法系と町に迄まで焼亡

○二月四日己刻之外込西納戸町よりお火入日向小石川辺二系小焼了
白山の辺より之焼もより日暮里まで焼了此焼は通院へ近入焼
死する者二百八拾人あり 一墓の堀をこし 墓舎あり 築土八幡宮白山社も此時
焼了通院災後救世法房法清未恙く法再建あり

○同寺前より一由火消を安小川町へ引くことあり

○二月十五日金剛工柵川改次奉 柵川の 祖あり

○二月廿日水府彦由法医吉岡林彦奉 八十七才年中大権と不業法義子 法教享保十年己九月奉せり

○二月廿二日水府彦由法医吉岡林彦奉 号儼聖

○二月法社の祭禮の時彦彦と名つけたる物をおぼしめし法清あり

○五月神田橋法門御本於る古林見宜醫書清法始 法医所 礎あり

○六月十二日 二廿七日 茶人懸宗知奉 号玉泉子不名廣徳寺 中林雲院小茶院

○書物圖書定了あり ○六月二日僧師法於保庸奉 孫友五而号實實母 法行谷地雲とあり

○七月廿一日魏町八丁目通より妻に十に女會所同奉小痛舎利 小痛舎利
をかり新町小おのんて又一顆をかり翌年壬寅六月朔日其會 こもれ

又一顆をかりと妻小室鏡子奉以里中の人皆法を親とせ

○小石川法華堂を不養生所建十二年より貧困の病者を修めく
葉解をよめぬ 此所の板を獨別板といひしこまより後土宿病人板と
り記名人は通院者恒居の医師小川曾取と云ふなり

享保八年 癸卯

二月十六日赤坂傳了町よりお火病水風烈しく甚病の久保近焼了
武家方町を額焼駈 あんち ちよこ ○二月十五日より三日の乃中村劫之節

芝居百奉の奉迎云新夜夜を敷積若大なるを具行に

○二月廿二日作と本云龍奉 七十四才文山の足能出あり
坊上中津運院小葬也

○二月廿九日御入志村金倫奉 六十二才

○二月十九日折奉人磨千奉忌 二月廿日石負金折奉社一
三恒折奉大御宗と道をおふ

○元禄銀室水銀中銀二ツ宝銀に付宝銀通用止

○五月十日新井明卿奉 白石二男 孫傳養後家
被尋中言連ち小葬也

○六月陽原深井秋水奉 八十二才

○七月廿六日池上本門中本堂再建入佛供養 宝永年中焼亡の後
廿二世日僧上人再真

○八月近在おろ 野とちりて鳴や
若羽のらりまは ○十月十日湯崎天満文造管辻文 時

賣女あり よりの土
若歳 ○十二月廿日身込よりお火市谷庄内内青町辺焼亡

○十二月十日狩野潤春福伝奉

同九年 甲辰 己月室

正月十二日英一謙奉 七十一才二本校義教中殿重院小葬以釋世
お火くうの浮世のよこの色くも有るやや未海雲の月

○正月廿九日お火町よりお火市谷庄内内青町東六本松町まで焼了其

口内門焼失してお火の後津再建也 本松町お火消
屋敷に並べり

○お火保八情文玄奉の災後修造成去後造小ありしむ

○甲府津城着始る○二月加辨 奉那より火災築地近焼亡

○六月七日狩野永叔之伝率六十才

○六月廿五日赤部元隆長廿敷十尺小腰る色目くすの

尾の細きうこと〜○八月津落前札元百九人不定る

○十一月廿一日俳人二世の立忘率濟業乃藤子 丹華次

○寛和通曆刊行系中根 元圭編

享保十年乙巳

二月十日青山久保町より火災赤坂尾谷市谷斗込大塚多羽
小石川築野弱込谷市下谷金杉まで焼亡

○二月廿五日百羅得重再建法事成就して是家先和尙元福の末の 市津を勧化あり切まされり

○二月十九日俳人菊后亭秋之率輝世 見一着のあてり色のうきつそ

○五月十九日宮儀新井白石先之率六十九才名譽字若義 淡室積政七津之徳と云葉

○六月廿二日古筆六代り青率五十二才

○七月廿日津路徳信一寸見河東死已十二才天海宗茂市所為本形と云後 七葉法を以建する碑本十二日と云之

○九月二日赤部元隆長廿敷の死大葉の葉の小うふりつるを長後大葉ののりこ 以後源川黒江町小居一斎校と号し

○十月大判出吹替元福大判止志盟多又出吹替あり

○今年長身の人志賀隨氣百七才 八才 小石坊吉忠百才 二才 伴後市吉忠百才 八才

石井坊吉忠百才 沼田伴茂百才 水村徳中九才 二才 榎田十吉忠九才 二才

中葉長身九才 二才

同十一年丙午

二月七日俳人生玉琴凡率号如葉屋加葉押ト 去葉と云小葉法

○二月廿日俳人琴之女率六十二才利葉して知渡と云り 吳若中念以中懐比小葉法

○二月廿九日儒師士把點翁卒 自親居士と号し 市谷長谷寺小葬

○今年五穀豊饒あり ○日向院より住持系那系那 天照山大吉寺

朝日如来深住 ○五月浅草小揚こあげの理を講元主人の光母不仕く

奇特の事ありて慶賞をのめり 時人情事山 紀伊并あり

○六月廿日能人の間占漁卒 六十二才号合歌聖 浅草寺に葬す小葬

○今年より十七年まで深川十方坪小流より清瀬あり 天文元年五月廿日 同不水清瀬あり

○十一月十八日大道寺友山翁尚齒令 志賀隨翁を願ふ人の 翁令と云姓名を詳

享保十二年 丁未 正月望

二月朔日夜丑半時光村東より西へ花雷の如く鳴り

○本撰町衆女ら来り来り協あり

○角田川本母と梅若九七百五十年忌深住 二月十五日 とも深住

○まき屋徳集流 知良初友山翁八十九才 編聖年退加流

○五月十二日能人宮村百里卒 号雷六十二才多田中一列西京江小葬を 釋世の句 死て並てとて一死月をんてとて

比勺をる不稿してとて書花里依文山の書あり 詩人雅慧の百里より田方あり 壯威 あり明を多ひ一う家唐七年七月六月お及深く山翁と申松海殿小葬也

○六月上旬より本撰町衆女ら来り来り協あり 常陸必所深大杉大御所

花梅りありとて芝流群集一可方家産流あり 英藤あり 採の産歌を忌一可系清を短あり 此本を流

○釜原定林卒 月日 未詳 ○十一月七日新林本町白子産産之節養子

又四家妻のよま系を代志八刑せり り無人の 初めあり

○十二月十日表二番町よりかき院町永田町産産の寅虎の市門之係 町ありこの指上る裏門其係をよま焼亡是より院町より通り

流能く成り ○十二月十日能人志邑佳凡卒 四十四才 約止 大旗と云葬を

○十二月由桑名川塚廣くふら由將小所小日向迎大木の所新土紀
自中あつぬあつなり

○九月晦日儒作伴為好義齋率 名邦達 泉岳寺小華

○十月廿日巨谷日字寺小鬼子母社像を安置す 日法上人他縁會 役人藤田素好末

○江戸社社書記刊行 荒井嘉敷 編

享保十三年己酉 九月間

○二月廿七日團学若源於光海率 名原良祿宮内七十一才 青山玉窓寺小華以

○三月十六日版田町坂上武家方より火 金田宗及 田安内門并於燒の

取用池小減る ○五月交辻國の鄭大威より寛有廣南國の廣大象

海 去年六月長崎(北社二匹を海を北へ長崎お於て變る今年四月廿二匹を大坂 幸來り四月系船(入大内)幸く五月廿五日江戸へ來り此中社あり一は寛有

小變るは寛有今も中社室京土ありこの時京師より 權御家の所并ありあり中社小變る事ありといふ

作の葉をうけしこのま川やこ一身をむるゆまぬ津代とて 鳥丸 光葉に

この所中村三迫り編の系家の真白梅屋をうり真珍記又編者西知系志たどりやま
を引せり江戸の俳人仙宿よりふふ 今やひくまの種物うこつむり
山王由系礼の時流町より大衆の飛り
物をいふ事この所のまねひありといふ

○十一月廿二日書方後於保考率 早野繁侯翁 孫清助 甚務台徳雲子小華以

同十五年 庚戌

○正月江戸町火消に十七組を十組小定し 目下お基の弱形あり纏の吹流 止てまま人を付るこの所小組に十

七組あり後小本組をきては八組に成小減止く遠く 小纏を多の大纏小まとひとあり 張流たり

○二月十八日原見十方庵の事自休終 二十九年江戸町 流光寺小華以

○二月本醫室證廿五冊刊行

○二月本坂氷川江神合并益々益々是社流煙をあり廿六日近云有

○三月田八幡文破損あり四月本多七古史を流して五月十五日より

日取五日のり地内おぼろけ勅化能具以

横波令ニ分たり一五集
一人分銀二あり

○五月金丸銀丸先年の通り通用済免

○六月十六日夜如軒志が随箱年

百八十三天連
中形院不詳

○八月廿九日大風お海川世三ろ重吹流せ築地大ありあ

○十一月鴉うがうりの疾を中も鼻とりとまゝあり

○おとりの聖年暮ふりり麻疹流行

身うち白牛
田をぬ

○是る那見沼不新田を築く

まうは申年下総不意な沼を新田不築
一は田番ちろ源友清といふ老を携ふ

あつりいせを合せりう今年も又 命ありて養終末文章風秀と信ふはり
多くの田をまうりいせは見沼の野川不船をせせんゆとせ一六九一あり
是立持玉の二取の内ありお西の地をぬひは戸神田川の辺あり
漕運年お合せりいせを西を西船と云ふ子孫弘化に年の得不たふ山田
与清是なり

享保十六年 辛亥

正月八日狩野栄川古信年 二十六才

○正月十五日お中風午下刻日自甚武家方とりお火は辺のとて

不動堂も焼失関はあそ町改代町辺中里赤坂の社を武家組

おあふ込市谷辺邊坂上下お堀堀まてお焼園時魏町二丁目續

番町一飛火半焼西門布とりお堀堀強くはお堀因際う愛辺信

彦藩邸虎津川幸橋お焼お宮社跡りお保町芝は通町筋お

明宮お浜池海海辺ふあり暮お時終る武家町屋を社敷り

お焼あり○五月廿一日官儒安見晚山年

名えた松文年
麻布首領と書

○七月十二日案入野田群翁年

名久志極楽あり
管仁と書

○八月十一日夜より十二日翌八時まて大風十七日夜并九月二日大

風あり○九月十七日狩野栄川の憲信年 二十才

○十月十二日日蓮上人百五十年忌徳寺院法会あり

○十一月十二日其落降せんかふり ○十二月十九日儒師右田希賢卒希賢八二本板

善教寺
小井寺

享保十七年 壬子 五月望

正月十二日儒師右野極齋卒名義及孫理平
右野極齋小井

○二月十二日徳富下青松寺より新橋を焼同日小石川白山

より火松平甲お彦郎おひりり

○二月増上寺柵門内子聖持現勅清

○二月廿八日徳富下青松寺門前より火徳富下青松寺社所方

焼亡は焼出系火除のこめ小橋屋町徳富町徳富町徳富町

○非田郡非橋門再建立町より非田郡入利の三分一を見送り合三百五と
収むし徳富町人より寄附をりて建立

○浅草寺命院より上丸新田医事職業所完結あきさ

○岩船地蔵寺国忌中々完結 ○天下肌腫疫流行ききん えきま

○六月十二日艮屋松風卒八十六才再卒於壬子
徳富寺小井 ○七月廿一日儒師平野

金華卒四十五才孫源富島為望と物店
徳富寺小井

○冬流鞠名人桑平光寿卒八十才非田小居せり鞠の空との小石川味を丹練
より通世の好まふして今も老あつ流鞠をす

○荒くお徳流形見入るは編写あり奇安
兼取のひり世上の風俗を述ぶる也

○江戸妙子初輯成七卷刊行兼是正原の編あり後版おひりり
恒形冬流補正再刻一今以て世に流る

同十八年 癸丑

東條若守奥山小橋樹を裁 ○江戸系酒林信元日暮里流汚毒

おぼへて十二景の詩あり十二景 後波系流 後又遠叙 徳富川夕照 権多村
田家 五子流林 平橋流 徳富秋月

徳富夜舟 黒髪山妙聖 徳富川流帆
中堅廻流 西系徳流

○七月廿五日世止の毒の障りより小幡一々井戸へ蓋をかぶり

○八月十二日官儒宗徳崇止の年七十八才通稱新脚邊の意甲賀町佐大坂持院東農家の後小藤氏

○九月十日能所桑忌貞作卒六十五才卒所法寺小藤氏

○十一月官医重月二英法茶法の七宝武兵衛丹を弘む

○十二月本所小法茶病癒

○大坂豊布祀前極江戸へ下り是より義寺寺前の澤指馬方小折まる祀前極不地意中世居所元と成る

享保廿年 乙卯 二月全

三月二日淡洲郡家士二十二回忌淡洲郡の齋居石碑を建て徳久有條小左衛門撰あり

○二月十九日儒所山田麟源卒名弘嗣孫大佐谷津南出小藤

○二月本石町初々人冬海を置る町医岩水玄浩杉山養元初冬を制して同本下湯仙日光人冬獨冬湯を弘む

○角敵まき人丸山授名左衛門長清を終合運○松板の名号回向院を定帳

○同所寺下徳新小幡宗帳あか○東叡山小幡天宮建

○五月七日書家佐々木文山卒七十七才上中津運院小藤氏

○五月晦日儒所齋見疾癒卒四十六才新堀正源小藤氏

○七月二日黒雲天を覆ひ大風瓦を吹り所々家屋を損を就巻しんま

ありとりし○秋澤川八幡宮の境内小幡所後堂を修葺又神中吉田家小幡あり一取こと小幡堂修葺る意保十八年四月廿三日と早雲寺宗祇法師墓の側并葬る

○十月麻布急焼亡あさぶ○青木真陽あきま卒文隆 長命を世家りて母蔭を

裁○夏末書也

長江の舟小落溪を穿ぎて今加茂新田と云ふあり又新田を以て

○世初武相の界修歴板小夜毎小川の音あり笛鼓は人の声

中々中老人の声一人あり辺在江管をりも安ふ人あり一十
る不審しとて翌日大坂府止秋并か

元文元年 丙辰 五月七日改元

正月仁風一覽上梓公布あり ○後忌令官板

○正月九日茶人斤忌左内率 号丁区 三痛 如來寺 本堂

○系業生時光源寺張子所新圓向院小寺宗帳

○同真如堂奉子湯の社地小宗帳 ○五月の字令報通利六月

引習始 文令報 といふ ○六月廿二日園林行率 初編と号しを居り 陸軍と丁字安と宗華の

○七月下旬より東の方小布丸早あり 表五時 以あり

○八月品川 山崎 大統寺小兵道子の等南浦補陀山徳海寺立石

親世宗像を写しと碑を立す 素人藤伯喬寫し 加茂氏造立

○八月晦日古等入仲率 八十一才等中 陸軍と小宗帳

○十月小梅村小寺湊を講せり 背文小の字あり今奉 猿の寺と講法あり

○十二月江戸大雷 合運 小か ○十二月五く大煩ひ多く死に

○武蔵野地々考梓行 鶴毛原上黄地村百冊 田原原を帝美章地 一りこの日記梓行 叙法編

同二年 丁巳 十一月圓

二月十六日より浅草寺親世宗宗帳

○二月廿九日同白正勅する時長谷寺の時持信表撞初めあり

○二月廿五日昼時外山の辺より流をくる坊中より小稻田町をりて

養老人亦不損也○五月二日下谷八軒町より火火止院士町を
上飛度小池池の端東敷山慈眼堂より坂本令於箕の端まで
焼く○七月十九日書家池永道雲卒 名英其家刻を長く
後系傳り形も不詳也

○八月川に管光とて小池魚小羅りしり并り再建の奉加
をとりむ男女老稚日毎小募縁の寄をりし証をたしり市
を群行し絶材を募り九月小和り信止せし事書生とてこの
奉加の事を後まるとの文あり則て守の文集も載りし とて面白けり
とされたり

○飛鳥山に榎樹を栽りありし同所一碑立吟風御文を撰定 全編と
任威
○八月廿日儒師文重忠卒 林と左史の
に谷飛りし事
○飛戸又深川小奈本川とて鑿後あり小奈本川とて鑿る所のも
表の端或は背面小川の字あり

○十月十日夜五時星月を貫く 東より月の中
入り南方あり

○十月七日世上一同小煙のやう吹か火事のかし此節暖氣 んき

中々筆し一梅花咲 ○国十月十二日二世英一傑卒 通称長八出川
陽嶽と不詳

○十二月十日水府彦儒臣安横渡泊卒 号老牛居五十一
あり舜水とての以て

○薩摩芋此とあり追く弘まる室磨ふりて上総下総と
云くありし也

元文二年 戊午

二月朔日夜五時以光お飛ぶ

○二月廿九日儒師阪田東溪卒 名陸奥 陸奥
卒後と不詳也

○二月廿七日書家岡秀行卒 林竹の男名義孝と稱行卒
陸奥とて不詳也

○五月賀名を序建 安吟風
と不詳也 ○五月五日儒師入江光華卒 名強字子
下谷常林と不詳

信々〇十月廿六日太淵程師寂

小石川二百板慈照院小
葉を能く出のゆえあり

此年間記事

小金井村多摩郡小和歌吉野常州櫻川の櫻の草を栽活のむ

植をせぬ一西あり一が愛豆の
ほまても於植一われ一とりの
〇武蔵志科子云於う森は情を境地り

ある所の鳥名の麻布難る所の先古川と云ふ小坂年在て齋を

見たり今も西の夕を齋るると鳴く元々の以鳥名葛原已う夕を世小

知るせんと此を於の森小秘一ゆきと返一あり書家の處

夕を好む加ありと云々

〇平林惇信信林 信高又と鎌倉清方書つとて室町の帳面を清方書つ

書を能くして大福帳の上書して賣事書かあり一うは清方書を

とてわたりては江戸中商家に大方彼う上書を求む惇信と

細井廣海ら門下入能書のゆえあり

〇石巻の藤操松とある市松形といふ身と藤枝は若佐村市松

好むと云ふ一なるなり〇藤子の花めんうとありあり

寛保元年 辛酉 三月二日臨元

正月廿二日書家と海友と交改辰年七十一才男友赤
車坂大谷小葉也

〇二月九日後後氏十二代基業年五十四才〇二月吉原仲の町へ櫻

を栽とてむ此後寛政三年のゆえり
裁て年例とあるなり〇二月朔日雲光院和尚要河寂

〇永代も老藤念情文年六十六才
海原寺〇七月十七日徳降依後周於年

〇七月廿二日新井宜柳年白ふ
男〇十二月廿五日捨像流劍柳祖

〇八月廿九日藤の年約述る林すふ葉あり釋世の身形付てあり
非佛ありうまうてゆるせんあありとて藤のふき

同二年 壬戌

寛政初後志才二六三帳 ○同日より王子権現同務行軍帳

○同日より日暮里澤光寺人丸形神軍帳

○同日より六所跡池下石鏡軍帳 仍基井子千 三奉辰徳表

○己月廿日医師平月百里率 号雷山又系唐七十九才清系其松院下 幕後和舟を結せ一人之因所百里二人

あり一人ハ能作三夜百里 雷等と号け浪走へうく ○同日月朝月より湯治社内より大坂天下

聖徳太子軍帳 ○同日より市谷八幡宮より野村東之村山医王

と女乐作如來軍帳 ○同日より池の妙善寺より比叡山坂本軍帳

と祖師軍帳 ○六月二日庵形乾山率 八十二才号清省孫形三所法橋 光雄の兄之弟と云ふハ非之陶器不

名あり茶子のせうくま 坂本量也と小舞也 ○同日月朝進比五尾中宿を信 比五尾八友町あり

横田辺の武士と似小徳死せりあり一より比五尾町中へあるを止めひ一中之は生を六 十帖ふ云神田よりあるを十一子孫田下云作所を新おとけを下と成宿ハ新和東所

を十く一八友町を中と一を藤原系つ政家系橋太田中 比因町町西へあるは中へ五尾 細加賀と云あり 正徳二年より 横小清其本海の陸中ふある上の比五尾の子びく尾二人

つまる令盛園を かろりなること云く ○七月朔日より廣系院坊町法務所軍帳

○同日より阪田町世羅務所行軍帳

○同日より市谷八幡宮より一と分風車寺の日輪院不動尊軍帳

○十一月上旬より夜々孫屋前の方小理氏 孫屋 といふ

此年間記事

那智宮通江戸小世六人あり駈一廻りありを孫一と云常仙といふ

人の輯ありキとの秋より小能書あり今所宮通と号ける若殿百人

ありやもろへうへに世道の表へるれね盛あつら知り

○宮中の地并山狩とあつけ一系屋女不くふあり

此年表之巻之四

編者 齋藤市左衛門幸成

武江年表卷之四

武江年表後編

從延享元甲子年
至嘉永元戊申年

四冊出來

嘉永二年己酉十月刻

大坂心齋橋通博旁町

河内屋茂兵衛

江戸日本橋通下目

須原屋茂兵衛

同 淺草茅町二丁目

須原屋伊八

發行書林

